

九夜月

川村龍俊

扉の裏側には部屋があつて三人は人がいるはず
壁の裏側には書棚があつて隙間なく本がつまつているはず
窓の裏側には雑木があつて奥は森になつているはず
電話がならないのがその証拠
机の上がきれい

まっすぐに奴めを探しに行く

森では冬以外なかない鳥と芽のない雑木が道をかくしている
星があつてもお月はみえる

いまずくに奴めは必ず

隙間がなくてもいい

三人いればいい

まして雑木に芽がない

きつと冬だから秋

あーもう

ヒトという種はなくて男と女があるだけだから
がーもう

この任務をすいこうするには落ち着きがたりない

静かな探検

ポケットにマツチ

電話はならないから携帯してはいけないの
何か思いついたらこまる

お月は半分に切れ目

かくされた道をてらして

電話がなる前にかえる

傘？

かさ

がさがさ

いないね

過疎？

かさこそ

いたいね

電波のとどかない森の奥で奴めは聞き耳

いい子はいないか

なく子はいないか

ふりむけば漆黒の闇じゃなくてお月にてらされた道標

初夏によんだ本の題名をおもいだしつづける行為をよびさます

扉がひらきだす

あと数秒で終末をむかえる探検のふりむきざまに奴めの耳

四人だった

はずれ